

NPO パートナースHIP協力プログラム 事業終了報告書

団体名 NPO 法人くすのき
代表者名 那須美香

1. 事業名
熱海土石流被災猫の保護事業
2. 事業カテゴリー
3. 事業期間
2021年11月1日～2022年6月30日 (242日間)
4. 契約金額
987,200円
5. 担当者名
那須美香 秋元里美
6. 事業目的
熱海市の土石流被害でペットを飼うことができなくなった被災者の猫を預かり、飼育することで、飼い主が安心して避難生活を送れるようにする。また、被災地で飼われていた猫の里親を見つけ、猫が平穩に暮らせる環境を整えることで、猫とひとが共存するやさしいまちづくりに貢献する。
7. 事業の成果
今回の事業では、伊豆山土石流災害（以下土石流災害）でレスキューした猫の預かり・飼養・譲渡を行った。被災直後から一般社団法人民間災害時動物救済本部（CDCA）と連携して、伊豆山地区で飼い主からの依頼による引き取りも含め、これまでに 150 頭以上の猫を保護した。被災した猫に関する業務は、弊団体がこれまで行ってきた熱海市内および近郊の飼い主のいない猫の保護・譲渡と並行して行った。
被災地域内にいた猫を一時的にほぼすべて捕獲した後、飼い主がいないことが確認された猫に関しては不妊手術を行った。捕獲した猫全てを保護することは団体の施設確保などの点からも困難なため、もともと地域内で餌やりを行う住民がおり、災害後も地域内に居住しているなどの確認が出来た場合は、元の場所に戻した。被災者からの依頼で預かった猫に関しては、被災者の生活が落ち着いた後に、被災者のもとへ戻した。怪我や病気を患っている猫や帰る場所のない猫、また被災者が新しい家で飼うことができない猫など 50 頭に関しては保護を続行。被災猫を保護するにあたっては、新しくシェルターを確保した。
猫を一時的に預かったことで、生活基盤を立て直さなくてはいけない状況の中、被災者の不安を取りのぞくことができた。残念ながら新しい家で猫を飼うことが出来ずに引き取りとなった方もいたが、いつでも会いに来れる環境を提供することで精神的な安定に繋がった。また地域に戻した猫に不妊手術を施すことで尿によるマーキング・発情期の大きな鳴き声をだす・猫同士の喧嘩等の頻度が減少し、被災地域の環境改善につながった。被災後、ストレスの多い近隣住民の苦痛を減少させることができた。
団体で保護を継続した被災猫が落ち着いて暮らすことができるよう店頭・東京の譲渡会での譲渡をも行った。伊豆山の被災猫は7頭を譲渡することができた。
猫を保護するための物資・費用の確保に関しては、SNS や HP で継続的に情報発信を行ったほか、過去に譲渡した里親の方々にメール等で直接支援をお願いした。当初の予想より保護の継続が必要な猫が多くなった。外での生活が長い猫がほとんどのため人馴れに時間がかかり、被災猫の譲渡もあまり進まなかった。また深刻な病気（FIP/猫伝染性腹膜炎）にかかる猫もいたため、医療費は大幅に増大した。情報発信を継続することで、継続的な物資支援を得たほか、事業期間中にクラウドファンディングも2回成功した。継続的な情報発信が事業終了後の寄付に繋げることができた。
8. 事業種別（コンポーネント）ごとの成果
【保護猫の飼育】
伊豆山の被災猫と通常の保護猫を合わせ、常時 200 頭以上の猫の飼育を下記の 4 ヲ所にて行った。
 - ・第1シェルター（スタッフ・ボランティア数5名）
 - ・第2シェルター（同上2名）

- ・第3シェルター（同上9名）※伊豆山の被災猫は主にこちらで保護
- ・保護猫ハウス「ねこハウス Temple Cat」（同上4名）...団体が運営する猫カフェ兼譲渡ハウス。
※月～土曜営業（12：00-17：00 最終入店）。
猫カフェとして利用の場合は入店料1時間1000円。延長30分500円。
- ・ケージや部屋の清掃のため新規のボランティアに入ってもらい衛生管理を徹底、病気の蔓延防止につとめた。
- ・猫たちが安心して暮らせるように、猫の性格によって部屋分けをしてストレスがかからないようにするなどの工夫を行った。また病気の蔓延を防止するため、保護日から2週間のケージ隔離、猫白血病ウイルスおよび猫エイズウイルスのチェック、数回の検便、ノミ取り、寄生虫の駆虫を徹底した。
- ・スタッフが基本的には9時～19時は常駐し、管理を行った。病気の猫や子猫がいる期間は夜間も泊まり、状態の管理を行った。
- ・餌が数日食べられなかった、土砂の堆積した場所にいたなど被災現場はもちろん、ほかにも厳しい環境から保護した猫のため、病気などで亡くなった猫も25頭おり、うち伊豆山被災猫は5頭だった。
- ・伊豆山被災猫の中でストレスによりFIP（猫伝染性腹膜炎）を発症した子が2頭おり、医療費（検査費・薬代）が例年より増大した。

【里親探し】

■東京譲渡会参加（譲渡会「ねこざんまい」<https://neko3mai.com/>）

譲渡会参加回数 13回（月1～2回）

譲渡会参加総数 148頭（のべ頭数）

譲渡総数 87頭（うち伊豆山被災猫7頭）

- ・プロフィールカード（ケージ前に貼り出す性格や月齢などが書かれた用紙）に伊豆山で被災した猫ということを書き足しを止めてもらえるようにした。
- ・プロフィールカードを見て足を止めてくださった方に、ケージ越しにおもちゃで遊んでもらったり直接触れ合ってもらったりした。そのことにより猫の性格や人馴れ具合をより把握してもらうことができた。
- ・譲渡会に参加することで譲渡数が大幅に増え、いただいた譲渡費用を新しく保護した猫のために使うサイクルを構築することが出来た。
- ・全国的に譲渡会の総数が増えたことにより沢山の命が助かっているが、ペットショップと同じ感覚で来場する方が増えてしまったため一部のブランド猫に人気が集中してしまう事態が起こっている。

■保護猫ハウスでの譲渡

店頭での譲渡数 9頭（伊豆山被災猫は0頭）

- ・来店のお客様に長く滞在していただけるよう、猫と遊ぶおもちゃの貸し出しや積極的な接客を心がけた。
- ・猫専門の情報サイト『ねこちゃんホンポ（nekochan.jp）』に定期的に取り上げていただき、記事に載っていた猫に会いに来店して下さる方が増えた。
- ・家庭の事情等で猫が飼えない方より、人懐こい猫ばかりでとても癒されましたという嬉しい声をいただいた。ある猫の保護主様が、ご自身では飼うことが出来ないということでその猫が譲渡されるまで定期的に来店して下さった。
- ・お客様に楽しんでいただく事の他に、保護猫団体としてどのような活動をしているのかを知ってもらう場所にもなった。

【運営資金確保のための資金・物資調達、情報発信】

- ・SNS（Twitter、Facebook、Instagram）を活用し、細かく保護猫の情報を伝えるとともに、キャットフードや猫砂などの物資支援についても定期的に情報発信を行った。
- ・クラウドファンディングを2回実施し、支援総額3,900,000円（支払い手数料含む）を得た。
1回目 2022年2月終了 2,355,000円（目標金額2,000,000円の102%）
2回目 2022年5月終了 1,545,000円（目標金額1,500,000円の103%）
→同クラウドファンディングサイトにて2022年6月からは継続寄付の募集ページも開始した。
- ・メディアへの対応を継続的に続けた結果、新たな個人から月々の継続的な寄付の申出に繋がった。
- ・某キャットフードメーカーより、2021年12月にドライフードおよびウェットフードの提供を受けた。継続支援の打診をした結果、2022年8月以降もウェットフードの追加支援を受けることが決定した。
- ・犬猫生活福祉財団の助成金200,000円を受けた。
- ・Amazon保護猫保護犬支援プログラムに参加、Amazonほしいものリストからの支援を募った。
(<https://www.amazon.co.jp/b?node=6876911051>)
- ・今回の災害ではホテルが避難所となったこともあり、被災者はペットと同行して避難を行うことができ

なかった。そのため行政や支援団体との意見交換の場やメディア取材の際には、同行避難への備えの重要性について情報発信を行った。また昨年熱海市役所に対し、伊豆山地域の住民に対し同行避難についての回覧板を回すよう働きかけた（しかしその段階では自宅に戻れない住民もおり町内会が機能していなかったため、回覧板を回すことは不可能だった）。現在は伊豆山地域の17区に住民が戻ってきているため、近々同行避難および野良猫の避妊去勢手術の重要性の啓蒙を目的としたパンフレットを作成・回覧予定。

その他の今後の活動としては、2022年9月に熱海市が開催する防災セミナーに参加し、同行避難の重要性について啓蒙する予定である。

9. 事業全体を通じて得た教訓や課題等

- ・本来はもっと譲渡を行いたく、土石流災害よりレスキューした猫たちを新しい家庭に繋げようとしたが、シェルターに入るボランティアの活動時間のほとんどが清掃・給餌に充てられており、人馴れが思うように進まなかった。

成猫は1年以上かけて徐々に信頼関係を構築していくことと、譲渡が決まりやすい時期が1月から3月と限定的なため、7頭のみ譲渡にとどまった。

- ・当初はコロナ禍ということもあり、オンライン譲渡会へ参加・開催する予定だったが、被災した猫もそれ以外の通常の引き取り依頼も大幅に増加したため、時間と人員が不足し、対応ができなかった。
- ・猫の生活環境を整える事を重点に置きつつ、今後はコアスタッフが遊びの時間をより多く設け、人と生活する楽しさを教えることが課題としてあげられる。

10. 協力体制の構築

- ・CDCA（一般社団法人民間災害時動物救済本部）...土石流災害現場で行方不明になっている猫たちを継続して捜索していただいた。（※現在は通報があった場合のみ出動）

11. Civic Force との協働について

毎月報告書を提出することで今後活動していくうえでの貴重なデータを蓄積することが出来た。

またPDCAサイクルを意識して活動することにより、今やらなければならないことが明確になった。